

追記一川棚にて長崎原爆に遭う

海軍技術科 33 期 第 17 分隊 吉川 康治

T・12・5・10 生

〒021-0877 岩手県一関市城内 9-18

TEL 0191-23-4739

1、はじめに

前稿第 1 部「出雲における川棚海軍工廠の終焉と私」を皆さんに読んで頂きましたところ、先輩から「原爆のことも書けよ」と何げなく言われました。しかし、30 年前にも書いたことがあり、二度書く気にはなれませんし、しかも、川棚におられたどなたかが「雷撃人生」に詳しく書いたろうと思っていました。

しかし、どなたも書いていないようなので、矢張り誰かが書き残しておかねばなるまいと思い直し、私が、相変わらずの下手な文章で、しかも曖昧な記憶ですが、前に書いたものを参照しながら、再び、第 2 部として書く決心を致しました。

2、川棚工廠片島発射実験場

第 1 部で書いた経緯で、島根県大和工業宍道工場で海軍(川棚工廠)が主導権を握り、91 式魚雷の完成品を作製することになりました。

そこで、春に、川棚工廠より派遣された、宍道工場調査団の一員の私が、昭和 20 年 7 月、軍需官になり、先発として宍道工場に駐在する事になりました。

それまでにも宍道工場では、呉、川棚等の魚雷の部品を作っておりましたが、完成品を作るとなると、今までとは異なり、諸設備、機械、原材料などのほか、工員の質、量ともに一層充実しなければなりません。

8 月中旬には、川棚から前田技師を主任にして、20 名程の工員が技術指導に出向して来ますし、材料、諸機械、その他、船で川棚から送り出される予定になっています。それまでには、出来るだけ会社の体制を整えておかなければなりませんので、会社の方々と共に、慌ただしく動き回っていました。

8 月 5 日ごろ、連絡のため川棚に出張、ここで、6 日に広島に特殊爆弾が落とされ、大変な威力のある爆弾である事、白い布をかぶると被害が少ないとの事などを聞かされました。

連絡、発送品の準備も終わり、9 日、宍道に戻ろうとしたら、前日、門司、下関付近が空襲を受け、列車が不通、その日は帰れなくなったので片島の発射場に行き、調整工場の尾崎技中尉の発射試験を手伝うことにしました。

大発(上陸用舟艇)に魚雷 5、6 本積み、調整工場の工員、学徒と総員 15、6 名で 9 時頃出発。片島の発射場は、確か工廠より東方 8km 位離れた所にある陸繋島の、入り江の深い所にありました。

私は、確か、特務少尉の検査官と、発射場を望む小高い丘の上の観測所に登って行きました。観測所と下の発射場とは電話で連絡をとりながら、進路、速度等、その他の測定をします。半分位発射実験が終わり、ちょっと暇が出て、私は双眼鏡で辺りの景色を眺めていました。

今朝方、警戒警報も解かれ、海は実に静かです。そして、緑の山々の上に入道雲が掛かり、実に雄大で美しい。たまたま、長崎の方向を眺めていると、機影が一機左の方向に飛んでいく。「どうも B29 の様だがな」と思っていると間もなく、双眼鏡が眩しく光って、目がくらみ、あわてて双眼鏡を離すと、山の尾根に沿って光が走り、夕焼けの様に空は真っ赤。それと同時に、もくもくと太い煙の柱が一本、凄い勢いで上昇していきます。どの位の高さになったのでしょうか。あの丸く広がる「きのこ雲」。何が起きたのだろうか。間もなく凄い音。長崎方面のガスタンクが爆発したな、と一瞬思う。距離、時間の感覚も無くなり、恐怖感のみです。間もなく、本廠より「空襲警報発令、全員退避せよ」という連絡。退避せよと言われても、小島のような発射場で退避する場所はありません。ただ、幸い、施設内に、水深 10M 位、直径 5~6M の機雷の水圧試験をする大きな穴があり、水が入っていません。差し当たり、そこにでも入ってしようと、鉄梯子を伝わって底に降りました。しかし、爆撃でもくらったら海の底です。

正午を相当過ぎていたのではなかったろうか。「急遽、帰廠せよ」との電話で、発射試験は、みな終わらなかったと思いますが、再び、大発に積んで、急いで帰る事になりました。工員、学徒、みな、何が何だか分からず、不安でこわ張った顔。とくに、責任者尾崎君は、どんな気持ちだったろうか。私は私で、川棚は元の古巣とは言え、今は島根からの出張中の身、ここで死んではいられない。死ぬなら一刻も早く島根に帰り、自分の持ち場で死にたいと、強く思いました。

工廠の埠頭に着くと、同期の中川技中尉(器具工場)が工員を引率し、私たちの乗っている大発を待っていました。

「長崎はさっきの一発の爆弾で全滅したらしい」。

長崎には、91 式魚雷を月産 500 本も作っている三菱兵器製作所があり、そこに川棚から大発に分乗し、応援に行くことになっておりました。

隊長の中川さんも悲壮な顔をし、私たちの帽振れに送られて出発して行きました。

私は水交社に戻りましたが、汽車はまだ不通のようです。

3、その夜の川棚駅

暗くなったばかりの8時頃、水交社に、非番の士官は川棚駅に作業服で至急集合せよとの命令があり、何事だろうと、若い士官が飛び出して行きました。

刻々と情報が入ってきます。

長崎に落とされた一発の特殊爆弾による負傷者が、臨時列車で大村線沿線の病院に少しづつ降ろされ、手当てを受けることになったという。

私は出張中の身なんて言うてはおられず、遅ればせながら駅に駆けつけました。勿論、灯火

管制で真っ暗闇、しかも、月も出ていなかったように思います。大きな声とざわめきの中、多数の工員や、担架、トラックが用意され、各士官の指揮で待機していました。

第1便の列車が着きました。列車からぞろぞろと負傷者が降りてきました。正に阿鼻叫喚、鬼気迫るとはこの事でしょう。

全身ほとんど真っ黒で、素っ裸に近い人間の列です。

真夏の真っ昼間の出来事ですから、ほとんどの人は薄着の服装だったでしょう。アンダーシャツとか、白いパンツの跡が割にはっきりと白い肌になって残ってる人もありましたが、ほとんどが全身火傷で皮がむけ、血と埃で真っ黒になっていました。緋のもんぺを履いた人でしょう、白い肌が緋模様に微かに残っている人。髪は焼けちじれ、男女の識別は出来ません。夜目に透かして、胸の膨らみで女だと分かる程度です。

まるで手に長い物をぶら下げているようだが、よく見ると腕の皮膚が火傷でむけて、垂れ下がっています。

声を出して喚く人。声も出せずに、夢遊病者のように、よろよろと出てくる人。ホームに出て来て、ぼったりと倒れる人。何処を抱えて助け起こしたらよいものでしょう。胸に真っ黒なものを抱き、泣き叫んでる人がいます。真っ黒なものは赤ちゃんの死骸で、離させようとしても固く抱きしめて半狂乱になっている母親です。幼子の兄弟だろうか、裸で手を握り合っ出てきました。親はどうしたんだろう。歩けない人は担架で運ばれる。私たちも何が何だか分からないまま、涙の出る余裕もなく夢中で誘導する。

列車の中には負傷者が、まだ沢山乗っており、次は早岐で降ろされるのか、佐世保迄行くのか、異様な雰囲気です。発車していきました。

川棚の海軍病院は、橋を渡って少し行った丘の上に、あつたような気がします。トラック、担架、徒歩で移動しましたが、病院に着いても、大勢の負傷者を収容する所もなく、廊下にごさごさを敷いて、身体を横にしているばかり。さらに、軍医官も看護婦も手が足りず、薬だって足りない、赤チンを付ける程度の応急処置だったようです。全く言葉にも表し得ない、地獄絵図ではなかったでしょうか。

次々と臨時列車で来るとのこと、何人来るのか見当もつきません。私は第一便の列車だけを手伝って水交社に引き揚げ、翌10日朝逃げるようにして川棚をたち、宍道に帰りました。

島根の空にもグラマンが跳梁していましたが、美保航空隊は全くの音無し。そして、ソ連の参戦を聞き、終戦となりました。

4、広島にて

8月下旬のような気がします。広島中国軍需管理局の田村廣二少佐からの連絡で、広島に参りました。田村さんに連れられて、広島原爆に遭われ、宮島の自宅で療養されている主計大尉を訪問しました。

大尉は直接光線には、当たっておられなかったそうですが、顔がむくみ、髪の毛が抜け、歯ぐきが紫色に腫れ、全く痛々しい姿でした。管理局のいろいろの物資は、とうに、宮島に疎開

させており、大尉が管理に当たっておられたのでしょう。

私の顔を見て、よく来てくれたとねぎらいの言葉を頂き、「間もなく君も故郷に帰る事になるだろうが、これは君の分だ、少しだが持って帰ってくれ」と、毛布、乾パン、その他、二、三の物資が用意してありました。それから、歓談しているちょっとした間に発作が起って、意識を失われ、奥様が医者を呼びに走るというありさまでした。典型的な原爆症であったようです。その後、どうされたか、申し訳有りませんが、知る由もありません。

その日は、宍道に帰る事も出来ず、芸備線沿線の小さな村に疎開されていた、田村さんのお宅に、一泊させて頂いたような気がします。

田村さんは、6日朝出勤間もなく原爆に遭われましたが、何階かの鉄筋コンクリートの大きな建物の中におり、運よく怪我もなく脱出することが出来たとの事でした。

私は山陰出張所に席があるのに、どうして直接広島に呼ばれていったのか不思議に思いましたが、宍道工場を魚雷工場に変換する事は、広島軍需局直属の仕事であって、それほど、海軍が必死になっていたというわけでしょう。

田村さんとは、7、8月の短い期間でしたが、いろいろご指導頂きました。その後、年賀状の交換だけはしておりましたが、お会いし、あの頃の事をお聞きする機会をつくる努力をしなかった事が、今になって悔やまれてなりません。

広島への帰りの汽車で、全身包帯に包まれ、担架に乗せられて、ご家族に抱えられた方に会いました。確か、原爆の直撃に会って、郷里に帰る報国隊の女学生ではないかと思いました。全身包帯に包まれており、病状について知ることができませんでした。

5、終わりに

私たちの時代には、死ぬ事は美しい事と教育されて来ました。葉隠れには「武士道とは死ぬ事と見付けたり」とか、小学1年生の修身では「死んでもラッパを放しませんでした」など、特に戦争を題材にして強く教えられました。確かに、信義のために犠牲になり、美しい行為とされることもありましようが、現実に肉体の死に直面してみると、死そのものが美しいものとは少しも思えません。戦争による死はもちろん、災害、事故、犯罪、自殺、そして、病気による死についてさえも、絶対美しいとは言えないでしょう。特に、長崎、広島に於ける原爆の犠牲者を眼の当たりにして、私はこんな残酷な死に方を招くような世の中が、二度と来て貰いたくありません。せめて、家族や親しい人たちに見守られながら、静かに死んでいける世の中であってほしいと思っています。

20世紀は、人が人を殺し合う時代でした。21世紀は、人と人、国と国、人類総てが信じ合える平和な時代になる事を祈るのみです。

「原爆忌遙かへ一機過ぎゆけり」

「終戦やまだ再会の出来ぬまま」

(2000・9・22)

フリガナ 氏名	キッカワ ヤスジ 吉川 康治	生年月日	大正12年5月10日
郵便番号	021-0877		
住 所	岩手県一関市城内9-18		
電 話	0191-23-4739		
最終学歴	昭18	9月	仙台高等工業学校 機械工学科卒
軍 歴		10	海軍技術見習尉官 以後航空魚雷製作に従事
職 歴	20	9	復員 民間機械工場に勤務
	23	6	岩手県一関市立山目中学校教諭 以後県内7校歴任
	60	3	定年退職 以後知的、精神障害、地域等のボランティアに従事 今日に至る